テストの命題を否定してみよう

札幌創成高校
外山尚生

０　はじめに

学生にとってテストというものは恐ろしいものである。テストの点数によって順位が決まり、テストの点数によって優劣が決まり、テストの点数によって成績が決まる。

今回のレポートではテストが抱える「命題」を否定してみたところ新しいテストの実践事例が思いついた。新しいテストの形を考えながら、テストのあるべき姿について考えていきたい。このレポートで否定したいテストの命題を次のように考えてみる。

命題１　テストは事前に問題がバレてはいけない。
命題２　テスト問題は教員が作らなければならない。
命題３　テストはすべての問題を解かなければならない。
命題４　テストは１００点満点でなければならない。
命題５　テスト解答をしなければならない。
命題６　追試験は赤点者しか受けてはいけない。

どれも当たり前のことばかりである。このテストの命題を否定して、そこから考えられる新しいテストの形を考えてみよう。

１　テストは事前に問題がバレてはいけない

生徒はテストが始まってはじめてテストの問題に出会うことができる。そのため生徒にその問題を解くために与えられた時間はテストの制限時間のみであり、それ以上の時間で解くことはできない。このことについて否定してみよう。

制限時間を延ばすことは不可能なので

事前にテスト問題をばらしてみた。

もちろんすべての問題ではなく、一部の問題である。もちろん問題は記述式の問題である。すると次のようなことが起こった。

（１）　平均点が上がった。
　　問題をバラしたから平均点が上がるのは当然である。

（２）　生徒が教えあいをしながら問題について考えるようになった。
　　生徒にとってテストは重要であるようである。問題を解けた人が解けない人に教える構図がうまれた。

（３）　生徒が解法を暗記するようになった。
　　教えられた人の一部には解法を暗記してテストに挑んだ生徒もいた。十分に理解をせずにテストに挑んだため、途中で解法がわからなくなり、答えを出せずに悔しい思いをした生徒もいた。数

学は解法暗記では駄目だということを学習する機会になった。

このようにテストの問題をばらすことで問題に対する十分な理解を促すよい機会になった。テスト問題を完全にばらすのではなく、どのような問題が出ているかテーマを話すことも勉強の方針を立てるよい機会になっている。

２　テスト問題は教員が作らなければならない。

問題は教師が作るものである（中には教科書や問題集から問題を選ぶ場合もあるが…)。このことを否定した事例が「ドラゴン桜２　１０６限目」に出ていた。東大の問題を作れというものである。問題を作るという問題はその内容を十分に理解していなければできないため、よい教育効果を生み出しそうだ。.
そこで

問題を作る問題を課題に出し、その問題をテスト問題にしてみた。

すると次のようなことが起こった。

（１）　テスト問題を作るのが楽だった。
これは問題を作る手間がなくなるのだから当たり前である。

（２）　生徒が作った問題はクラスラインで共有されることになった。
生徒から集めた問題は教員からは流さないよと言ったところ、問題はクラスラインで共有されることになった。結果、生徒の人数分の問題を生徒は解かなければならないことになり、「１　テストは事前に問題がバレてはいけない」と同じ効果がうまれた。

（３）　良い課題学習になった。
中には身近な事象を扱ったものや、共通テストを意識したものなどこだわった問題を作る生徒も出てきて、よい課題学習の機会となった。

問題を作るという問題はよい課題学習のきっかけとなる。生徒が入試問題や共通テストの勉強が進んだ頃にもう一度やってみたい課題である。

３　テストはすべての問題を解かなければならない。

テスト問題を作る際に、多くの問題を解かせたい場合がある。しかし、テストには時間制限があるし、すべての問題を解かせることができない。
そこで

問題を選択問題にしてみた

１０題の中から好きな問題を４題選択して答えなさい。といった感じの問題である。すると次のようなことが起こった。

（１）　テストの平均点が上がった。
選択肢が増えるのだから、生徒が問題を解ける確率が上がる。その結果、平均点が上がった。

（２）　生徒が自分の得意な問題、わかる問題から解くようになった。
問題１から解くのではなく、得意な分野の問題、解法が思い浮かぶ問題から解くようになった。
これは入試などのテストにおいても大切なテクニックとして生かされることになる。

選択問題を作った結果、自分が得意な問題、苦手な問題、解法がすぐに思い浮かぶ問題、解法が思い浮かばない問題を即座に判別することができるようになったのは成果であった。テスト問題を必ずしもすべて解かせる必要はないのである。

４　テストは１００点満点でなければならない

３の選択問題の延長である。せっかく作った問題なのだから、たくさんの問題を解いてほしい。例えば、２題選択する問題を３題解いてもよいのではないか。制限時間の続く限り問題を解いてほしいと思った。そこで

指定問題数以上の問題を解くことを認めることにした。

例えば２題選択する問題があったとき、３題目、４題目を解くことを認めた。採点に関しては高得点のものから順番に採点し、追加分に関しては通常の半分の点数を加点することにした。
すると次のようなことが起こった。

（１）　１００点を超える生徒が出てきた。
　　１００点越えを狙う生徒が出てくるなど、向上心を持って努力する生徒が出てくるようになった。
　　１００点を超えたときはうれしいものである。

（２）　最後まであきらめずに考える生徒が出てきた。
　　テストに限らず、何事も最後まであきらめないことは大切なことである。

追加答案を認めることで、高得点を取る人や、赤点をとる人が少なくなった。数学が得意な人は１００点越えを目指して難しい問題にも果敢にチャレンジするようになり、苦手な人は解ける問題だけをつまみ食いして解いていくことで点数を取るなど、人それぞれにあった点数の取り方を考えるきっかけになった。

５　テスト解答をしなければならない

テスト解答の時間は退屈なものである。できている人にとってはわかっている問題を繰り返すだけになるし、わからない人にとってもわからせるために十分な解説の時間をとることは難しい。テスト解答をもっと効率的で学習効果のあるものにしたい。そこで

テスト解答をせずに、解答のヒントだけを与え、テストの解答をつくることを課題にした

問題の解法や着眼点、ヒントのみを乗せたプリントを準備し、正式な解答を作ることを課題にした。もちろん、解答を作るためには教科書などを調べることも可能にし、教員に質問することも可能にした。どんな手段を使ってもいいので、解答を作ってこいというわけである。

すると次のようなことが起こった。

（１）　テストが終わっても勉強する姿が見られるようになった。
　　テスト後は解放感で遊んでしまいがちになるが、テストが終わってからあとも勉強する姿が見られるようになった。

（２）　調べながら、質問しながら問題を解く癖がつくようになった
　　教科書を調べながら解く人や友達と教えあいをしながら解く人など理解するためのいろいろな勉

強法を身に着けることができた。

（3） 自分のペースでじっくり考えて解くことができるようになった

テストの時間が終わってもじっくりと問題に向き合う生徒が出てきた。

テスト解答を作る課題は教えられる勉強ではなく、自分で考える能動的な勉強である。自分で解くことによって、テストの時に解けなかった問題も、自分で解く喜びを身に着けることができる。

6　追試験者は赤点者しか受けてはならない

赤点者には追試という嫌なものが待っている。せっかくテストが終わったのに、まだテストをしなければならないのは嫌なものだ。でも、逆に考えてみよう。追試験者は２度テストを受けることができる。それは得なことではないか。そこで

追試験を誰でも受けられるようにしてみた

赤点者だけが追試験を受けられるのではなく、自分の点数に満足いかない人は何回でもテストを受けてもいいよということにした。ただ、このままではテストを数多く受けたもの勝ちになってしまうので、追試験を受けた場合、その点数が良くても悪くても点数を塗り替える、つまり追試験の点数を採用することにした。もちろん、追試験の問題は毎回違う問題にしている。

すると次のようなことが起こった。

（1） 追試験の結果、点数が上がった人と下がった人が出てきた。

当たり前のことである。何度も受けた点数と１回だけ受けた点数。どちらが正確な点数なのだろうか？

（2） 追試験に向けて勉強する人が出てきた。

せっかくなら１００点を目指したいと勉強をしてきてテストに挑む人が出てきた。できなかった問題を見つけ、勉強する良い機会になった。

（3） １００点を目指して何度もテストを受ける人が出てきた。

何度もテストをうけることにより、問題を解いたり、出力する回数が増えた。

この実践は東京の千代田区立麹町中学校の元校長、工藤勇一氏が行っていた事例をもとに実践してみた。さすがに定期テストで行うことは無理だったので、小テストで行ってみた。何度もテストをすることで、出力の回数が増え、勉強する機会が増えるのはとてもよい実践であると思う。

しかも数うちゃ当たる戦法で勉強せずに何度もテストに挑む生徒ほど、点数が変わらなく、むしろ下がる傾向にあった。やはりテストはテスト勉強をして挑むものである。

7　まとめ

テストの命題を否定し、新しいテストの実践事例を紹介したが、新しいテストの形を作り出すことにより、生徒に新しい学習の機会を与えることができた。どのようなテストであれ、絶対に否定すべきでない命題がある。それが「生徒によい学習機会を与えなければならない」である。普段の授業だけでなく、テストを通して多くのことを学んでほしい。そのためにも新しいテストの形を考えることは無駄ではないのである。